

中学校 国語科 部会

部会長 大任中学校 校長 小田 玲子
実践者 糸田中学校 教諭 青柳 美香

1. 研究主題

自己有用感・自己肯定感を高める第1学年国語科学習指導の研究
～相手に伝える文章を「書くこと」を通して～

2. 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

現在、日本国内を見ると様々な社会問題が山積みのまま残されている。生徒たちに身近な問題としては「不登校」や「ひきこもり」「ニート」などがあげられる。本校も、本年度から3年間、糸田小学校とともに重点課題研究指定『新たな不登校生を生まないための小中連携による生徒指導の推進』を受けている。研究の中では、「わかる」「できる」授業づくりが魅力ある学校づくりにつながるという着眼点で「自己有用感・自己肯定感を高める教育活動の推進」に取り組んでいる。

また、これらの問題には、根底に「自分の考えをもつことができない、伝えることができない」「相手の立場を尊重することができない」ということがあるように感じられる。激しく変化するこれからの社会をよりよく生きていくためには、相手の立場を尊重し、協動的に合意を見いだす姿勢が尊重されるようになるだろう。それには、論理的な表現力の育成が必要である。論理は思考を整理するとともに、人を動かす力ともなる。学習指導要領でも「伝え合う力を高める」ことが目標に明記されている。

(2) 生徒の実態から

生徒を取り巻く家庭環境・教育環境も必ずしも恵まれているとはいえない状況にあり、4月に行われた標準学力分析検査では、県平均を2.8ポイント下回った。特に、作文や感想文が嫌いだという意識から、「書くこと」に対して苦手意識を持っている生徒が多い。実際この研究を行った学級(24名)については、評価Aが7名(29%)評価B9名(38%)評価C8名(33%)であった。課題に対する思いや主張はあっても、どう伝えていいのかわからない生徒が多数いるため、授業の導入で文章を書く活動を取り入れている。

(1年生は週1回程度、3年生は毎時間)そのため、5行程度の簡単な文章であれば全員が書けるようになってきている。しかし、筋道を立てて相手に伝える文章を書けるまでにはいたっていない。実際に「流水と私たちの暮らし」を要約させてみる(22名)と、評価Aあたる生徒は6名(約27%)、評価Bが9名(約41%)、評価Cが7名(約32%)であった。

苦手意識がある分野こそ「わかった」「できた」という成就感や喜びを感じさせることが大切である。これらのことから、自己有用感・自己肯定感を高める授業を「書くこと」で取り組むことは大きな意義があるものだと考え、本主題・副題を設定した。

3. 主題の意味

(1) 相手に伝える文章を「書くこと」とは

「書くこと」における第1学年の目標には「構成を考えて的確に書く能力を身につけさせるとともに、進んで文章を書いて考えをまとめようとする態度を育てる。」と明記され

ている。その目標を達成するため、次の方法で授業に取り組んでみたい。

まず、前の教材である「流氷と私たちの暮らし」から、論理の展開や要約の仕方を学ぶ。生徒が相手に伝える的確な文章を書くことができるようになるためには、優れた表現に触れさせ、それを自分の表現に生かす「読むこと」も必要である。特に、全文を要約する学習は初めてなので、班活動などを取り入れる。次に、伝えたいことをはっきりさせ、わかりやすく的確に書くことなどの表現方法を学ばせるために、ワークショップ型の授業を取り入れる。そのうえで教材「調べたことを報告しよう」で、伝えたい事実や事柄、自分の意見や感想を明確にして、わかりやすく相手に伝わる文章が書けるように導いていきたい。

(2) 自己有用感・自己肯定感を高めるとは

自己有用感とは、「自分の属する集団の中で、自分がどれだけ大切な存在であるかということ」を自分自身で認識すること」である。また、自己肯定感とは、「自分は大切な存在だ。自分はかけがえのない存在だと思える心の状態のこと」である。これらは、生活・教育環境によって大きく左右されると考えられており、教育上の重要な要素だと考えられている。この2つが高いと、「自分に自信を高めることができる」「心の受容が大きく、少々のことではめげない」「意欲的に人間関係を築くことができる」とされている。

授業で自己有用感・自己肯定感を育て、高めるためには、まず、自分の力でできたという成就感と自信をもたせることが大切である。次に、生徒の失敗体験もチャンスと捉え、結果より努力を認め、誉めて励ますこと、さらにそれを周りにも伝えることである。これをくり返して指導することにより、自己有用感・自己肯定感は育成され、高められていくと考えられている。

難しいことばだが、この2つとも「自分はこういう人間なんだとわかること、自分のいいところも悪いところも認めること」なのではないか。それは自分の考えをしっかりともち、それをお互いに伝え合うことがもたらしてくれる力なのではないかと考える。自分の考えを相手に伝える文章を書き、読み合い、交流するという「書くこと」を通して主題に迫りたい。

4. 研究の目標

ワークショップ型の授業や交流など、「書くこと」の学習活動の工夫が、自己有用感・自己肯定感を高める学習指導につながることを検証する。

5. 研究仮説

第1学年「書くこと」において次のような手だてを取れば、自己有用感・自己肯定感を高めることができるであろう。

(1) 優れた表現に触れさせ、それを自分の表現に生かす学習活動の場を設定するようにする。

教材文「流氷と私たちの暮らし」を要約する。要約は、班活動を取り入れ、キーワードの選定等をさせる。字数も200字程度に設定し、全員が書けるように仕組む。また、要約をさせることで、文章の構成に着目したり、文章の中心となる部分やそれを支える部分の読み分けができるようにしたりする。

(2) ワorkshop型の授業を取り入れ、的確に書くことなどの表現方法を学ぶことができるようにする。

ワークショップ型の授業は、「活動」を通して学ぶことで、主体的な学びの力を育てる

学習方法である。具体的には、課題について試行錯誤をしながら自分自身で考え学び、わかるという成就感につなげていく学習活動であり、自己有用感・自己肯定感を高める活動として適していると考ええる。

(3) 自分の考えを相手に伝える文章を書き、交流する活動を行うようにする。

教材「調べたことを報告しよう」を参考に、日常生活の中から題材を選び、レポートを書かせ、お互いに交流させる。

題材は身の回りにあるものや今頑張っているもの等、主体的に調べ学習ができるよう自由に考えさせた。題材を選ぶときには、なぜ調べたいのか理由をはっきりと言えるもの、調べたい項目を3つ以上挙げられるもの、周りの人に知ってもらいたいことなど、いくつかの約束事を決める。また、レポートを書くときには、ワークショップで学んだ「伝える」という相手意識をもって書くことを確認する。

さらに、レポートを班ごとに交流し、評価し合う活動（各人のレポートのいいところを必ず評価し合う）を入れることで、考えを深めたり、成就感を味わえるようにする。

6. 研究の計画

(1) 単元5 論点をとらえる 教材「調べたことを報告しよう」レポートにまとめる

(2) 単元の目標及び指導計画

単元 (教材)	論点をとらえる (調べたことを報告しよう)	総時数	23時間 6時間	時期	11月～12月 12月
単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> ○日常生活の中から課題を見つけ、それについて調べたり、考えたりしようとしている。(関心・意欲・態度) ○伝えたい事実や事柄、自分の意見や感想を明確にして、わかりやすく相手に伝わる文章を書くことができる。(書くこと) ○レポートにふさわしい言葉遣いを意識している。(言語についての知識・理解・技能) ○レポートを読み合い、お互いのレポートの内容を深め合うことができる。(関心・意欲・態度) 				
次時	具体的な目標	学習活動・内容	指導上の留意点(援助・支援)		
前 教 材	1 1	文章の構成に注意しながら、内容を要約しよう。 1. 「流水と私たちの暮らし」を要約する。 ①要約の手順を考える。 ②中心段落を確認する。 ③キーワードを抜き出し、確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ p168 「文章を要約する」を読ませて、要約する手順を確認する。 ・ 中心段落から、それぞれキーワードになることばを抜き出させる。全員が取り組めるように、後半は班で確認させる。 ・ 文章の中心となる部分やそれを支える部分の読み分けができるよう 		

			④要約をする。	に机間巡視をして助言する。 <ul style="list-style-type: none"> 文章の構成に着目させる。 中心となる部分やキーワードをつなげて要約させる。
--	--	--	---------	---

1 本 時	1 / 1	相手に正確に伝わる文章を書こう。	<p>1. 正確に伝わる表現方法や構成の仕方などを学び、文章を書く。 (ワークショップ型の授業)</p> <p>①「図形」を正確に書いてもらえるような文章を書く。</p> <p>②お互いの文章について交流し、正確に伝えるためにどうすればいいのか、意見交流をする。</p> <p>③自分の文章を書き直す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ペアでそれぞれに違う図形を与えて、それを文章で相手に伝えさせる。 自分の文章では、なぜ伝わらないのか、どのような文章を書けば伝わるかを交流させる。 交流したことを取り入れながら、自分の文章を書き直させる。
2	4	調べたことや自分の考えをレポートに書こう。	<p>1. レポートに書く課題を決め、情報を集めて記録する。</p> <p>①「レポート」という文の種類について確認する。</p> <p>②自分の調べたいことを探し、課題を決定する。</p> <p>2. 情報を集めて、整理する。</p> <p>①情報を集める。</p> <p>②情報を取捨選択する。</p> <p>③レポートの構成を考える。</p> <p>3. レポートを書き、完成させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> p 174 「レポートの例」で、「レポート」の形式や内容を確認させる。 課題の探し方については助言をする。 課題について調べたいことを考えさせておき、本やインターネットで情報を集める。 調べた情報を内容ごとに分類させ、自分の課題を説明するためには、どの情報が必要かを考えさせる。 ②で取捨選択した情報を、どのような順序でまとめるか考えさせる。

			①レポート用紙に全体をまとめる。 ②レポートを推敲する。	・レポートには、「調べた内容」と「まとめ（自分の考えや感想）」を必ず入れさせる。 ・推敲の観点を確認させる。
3	1	レポートを読み合い、お互いのレポートの内容を深め合おう。	1. お互いのレポートの内容を深め合う。 ①班でレポートを読み合う。 ②各人のレポートについて、意見交換し、学習を振り返る。 ③全体で、学習の振り返りをする。	・友達のレポートを読み、気づいた点などを書かせる。 ・書いてもらった意見に目を通し、交流する。 ・学級全体で、気づいた点などを交流させ、学習のまとめとする。

7. 指導の実際

(1) 本時の指導観

前時までには生徒は、「流水と私たちの暮らし」を読むことで、論理の展開や要約の仕方を学んできた。また、「調べたことを報告しよう」では、レポートの書き方の例が、手順を伴って丁寧に書かれている。

そこで本時では、生徒たちが書く活動にスムーズに入るために、ワークショップ型の授業を仕組む。まず、ペアになりそれぞれに違う図形を与える。その図形を文章で相手に伝えてもらう。次に文章を交換させ、交換した文章を見ながらその通りに図形を書くのだが、うまく図形が伝わるペアはほとんどいないであろう。そこで、自分の文章ではなぜ伝わらないのか。どのような文章を書けば伝わるのかを話し合わせる。そこから、相手に正確に伝えるための文章のまとめ方や構成の仕方などを考え、全員で確認する。次に、確認したことを取り入れながら、先に書いた文章の書き直しをさせる。最後にそれぞれの文章を評価し合うことにより、自己有用感・自己肯定感の育成につなげたい。

(2) 本時の主眼

ペア学習を通して相手に正確に伝える表現方法や構成の仕方を学び、自分の文章を再構成することができる。(書くこと)

(3) 展開

	学習内容・活動	形態	教師の指導・援助	評価規準・評価方法	配時
導入 ／	1. 本時の学習内容を確認する。	一斉	○伝えることの難しさを感じさせる。		3
	(めあて) 相手に正確に伝わる文章を書こう。				
	2. 「図形」を正確に描いてもらえる	個	○作業の流れをワークシートを使って説明	○主体的に考えようとしているか。【関心・意	10

展	<p>ような文章を書く。(資料2)</p> <p>3. ワークシートを交換し、ペアの人が書いてくれた文章の指示通りに図形を書く。</p>	個	<p>する。</p> <p>○書くことがとまっている生徒については、必要に応じて言葉がけを行う。</p>	<p>【欲・態度】</p> <p>○相手や目的を意識して文章にすることができるか。【書くこと】</p>	3
	<p>(1) お互いの文章について交流する。</p>	ペア	<p>○交流が進んでいないペアについては、視点を助言し、お互いの文章のいい点・悪い点を交流できるようにする。</p> <p>○伝えることの難しさを体感させる。</p>	<p>○文章のわかりやすかった部分とわかりにくかった部分について交流することができる。</p> <p>【関心・意欲・態度】</p>	10
開	<p>(2) 効果的な文章表現や構成の工夫を整理する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ 比喩を使う。 ・ 線の長さや図の大きさなど細かい指示をする。 ・ 相手に伝わりやすい順序を考えて書く。 </div>	一斉	<p>○交流から導き出されたものを確認し、文章の表現方法や構成について整理していく。</p>	<p>○効果的な文章表現について理解することができる。【言語についての知識・理解・技能】</p>	13
	<p>5. 自分の文章を書き直す。</p>	個	<p>○今度こそしっかり伝える文章を書こうという意欲を喚起させる。</p>	<p>○アドバイスを自分の文章に生かして書くことができる。【書くこと】</p>	5
／	<p>6. 書き直した文章を再び交換して、お互いに読み合い、評価をし合う。</p>		<p>○1回目の作文と比べてよくなっているところを伝え合うようにさせる。</p>		5
まとめ	<p>7. 次時の予告を聞く。</p>	一斉	<p>○次からは、レポートを書くことを伝える。</p>		1

【資料3 レポートの例】

<p>日本や外国の交通</p> <p>目次</p> <p>1. はじめに</p> <p>2. 調べる方法</p> <p>3. 日本や外国の交通</p> <p>(1)日本はなぜ左通行なのか</p> <p>(2)日本の歩行者はなぜ右通行に統一されないのか</p> <p>(3)外国の交通</p> <p>(4)ヨーロッパでイギリスだけ左通行なのはなぜか</p> <p>(5)採用国</p> <p>4. まとめ</p> <p>5. 参考資料</p>	<p>1.はじめに</p> <p>日本では左通行は普通だが、1歩外に出た韓国や中国などの国は、みんな右通行だ。なぜ日本は左通行なのか、他の国はどうなのかわかるといい。</p> <p>2.調べる方法</p> <p>(1)インターネットのウェブページを見る。</p> <p>3.日本や外国の交通</p> <p>(1)日本はなぜ左通行なのか</p> <p>日本では、江戸時代頃から武士などが左側に差している刀が邪魔なことから、自然と左通行になったという説と、明治政府がイギリスの制度に倣ったためという説がある。</p> <p>(2)日本の歩行者はなぜ右通行に統一されないのか</p> <p>日本では自動車と歩行者が同じ左通行だが、自動車の増加に伴い、交通事故の危険性が増加したことから、第二次世界大戦後に</p>	<p>自動車と歩行者の対面交通が採用された。その際歩行者の通行方向を右通行に変更した。しかし、鉄道駅構内では、人が左通行をすることを前提に設計されたため、右通行を採用後も左通行を採用していることが多い。</p> <p>(3)外国の交通</p> <p>欧州大陸諸国の右通行については馬車の駆逐は右手を鞭を振るるので、対向する馬車に鞭を当てないために自然と右通行になったという説や、フランス革命の際に教会の定めた左通行に抵抗して右通行にしたのち、ナポレオンがヨーロッパ各地を占領していたことで普及したという説がある。</p> <p>(4)ヨーロッパでイギリスだけ左通行なのはなぜか</p> <p>ヨーロッパ諸国では右通行なのにイギリスが左通行なのは、イギリスはナポレオンに征服されたから、なので古来からの左通行が残ったという説が有力。しかしその説が本当なら、欧州諸国の右通行はフランス革命の際に、教会に抵抗して右通行にし</p>	<p>その後ナポレオンが広めたという説が最も有力になることになる。</p> <p>(5)採用国</p> <p>左通行を採用している国は少数で、左通行と右通行の人口比は34:66。道路の延長距離の比は275:725になる。左通行の主な国は、イギリス、日本、タイ、インドネシア、マカオなど。それに対して、右通行の主な国は、北米大陸諸国、欧州大陸諸国、中国、韓国、ブラジル、モンゴリなど。左通行国では右ハンドル車が多く、右通行国では左ハンドル車が多い。</p> <p>4. まとめ</p> <p>日本にくらぶれば左通行は普通であるが、世界には右通行の方が多く、それぞれにその歴史があり、自分の知らない世界を知ることができる。今回交通について調べてみたことと通じて、新しいこと知ることの面白さを知ることができた。</p>
--	---	--	--

題材は様々だが、ほとんどの生徒が【資料3】のような形式のレポートであった。交流で出された意見として は、いい点として「内容が分かりやすい」「テーマに対して自分の思いや意見が書かれている」などがあげられた。改善点としては、「図や表を用いること」「効果的なテーマをつけること」などがあげられた。ワークショップ型 授業で伝わらないもどかしさを体験した上で作成したので、「みんなにわかりやすく、伝える文章を」という意識のもと作成することができた。また、完成したものを誇らしげに読み返す姿が印象的であった。

9. 成果と課題

(1) 成果

現在1年生は3クラスあり、2クラスの授業を受け持っている。4月の学力分析検査での結果、国語の平均点が一番高いクラスと低いクラスの差が13点もあった。今回、特に一番平均点が低かったクラスに焦点を当てて授業を行った。その際、一番大切にしたのは、全員が書くということである。そのために、班活動やワークショップ型の授業なども取り入れた。その結果、生徒達の中に、「やればできる」という意識が芽生え始めたのを感じた。それは、まさに自己有用感、自己肯定感の育成につながるものである。

実際に11月に行われた到達度診断シートで差は7点に縮まり、2学期の中間テストと期末テストの平均点は、このクラスがトップであった。意識の変化で、生徒は努力もするし、学力も向上するということを改めて感じた研究であった。

(2) 課題

今回のレポートのまとめでは、【資料3】のように、題材に対しての感想はよく書かれていた。しかし、その題材に関して自分の意見を深めるようなまとめを書けたのは、約70名1名であった。【資料4】「相手に伝えること」に焦点をあてすぎて、自分の考えを深めるような手段が取れていなかったということは、大きな反省点であり、これからの課題である。

【資料4】

<p>4. まとめ</p> <p>宇宙について疑問に思ったことを調べてみて、まず驚いたことは、このように説を書き出した科学者たちがいる。それは、観測や推測だけでなく、理論的に説を書き出したからだ。理論的ではないし、不可解な説ばかり。自分自身も考えた宇宙説がある。それは、宇宙自体が人のような体で、星や地球などは臓器や細胞で太陽は心臓。だから、心臓である太陽が破滅すると宇宙は終わる。そして、脳である星は遠すぎて見えさえない。宇宙は一人の体と考えるから宇宙のような空間は他にたくさんあると思う。それが私の考えた説だ。宇宙について調べてみると、宇宙に対する考え方も変わってきた。興味もわいてきた。しかし、宇宙は謎だらけなので調べても曖昧な所があり、はっきりと真実を知ることが出来なかった。宇宙の謎を少しは理解出来たし、たくさんの説があることを知ったので、それだけで宇宙の知識が自分に身についたと思う。</p>
--

◎参考文献

- ・中学校学習指導要領解説 国語編（平成20年）文部科学省
- ・ワークショップ型授業で国語が変わる 図書文化
- ・『自己有用感 一生きる力の核一』 北島貞一著 田研出版
- ・『生きることと自己肯定感』 高垣忠一郎著 新日本出版社